

297. 弁天島遺跡出土の玦状耳飾

けつじょうみみかざり

1. はじめに

蒲生郡安土町下豊浦では県営ほ場整備事業に伴い、弁天島遺跡の発掘調査が平成11・12年度に実施された(調査主体:滋賀県教育委員会、調査機関:財団法人滋賀県文化財保護協会)。この調査では縄文時代の遺構や遺物包含層が検出され、大量の遺物が出土した。

出土遺物には玦状耳飾7点が含まれる。この玦状耳飾は直径数cmの環状の石製品で切り目をもち、この切り目を耳たぶにあけた穴に差し込んで装着したと考えられている。縄文時代早期末から中期初頭にかけてみられ、その名称は古代中国の玉器である「玦」に由来する①。

本稿では弁天島遺跡の概要を述べた上で、これらの玦状耳飾について紹介し、若干の位置付けを行いたい。



第1図 弁天島遺跡位置図 (S=1/50,000)

2. 弁天島遺跡について

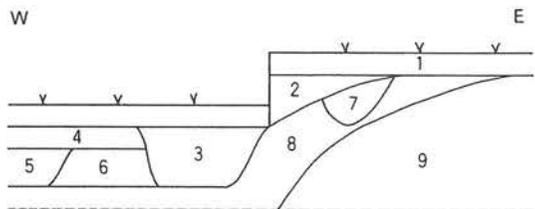
弁天島遺跡は旧弁天内湖の湖底に立地する(第1図)。弁天内湖は、戦時中に食料難による農地造成のため干拓された。その際、その名の由来となった弁財天が祭られる内湖南部の福之島周辺の湖底において、縄文遺跡の存在が確認された。これが弁天島遺跡である。

1949年に山内清男氏を中心に、東京大学・京都大学合同でこの「安土遺跡」(弁天島遺跡の当時の呼称)の発掘調査が行われ、縄文早期・前期を中心とする遺物が大量に出土した②。しかし、この調査は正式に報告されていない。よって今日ではその10ヶ所以上の調査地点の正確な位置も不明であり、断片的な情報が知られるにすぎない。早くから関西では数少ない縄文早期・前期の遺跡として著名でありながら、弁天島遺跡の実態はいまだ不鮮明と言わざるを得ないのである。

3. 発掘調査の概要

今回は78haに対して試掘調査を行い、その結果約9,000㎡を対象に発掘調査を行った。遺構を検出したのは福之島弁財天から北方へ伸びる砂洲状の微高地上で、青灰色砂~粘土層(第2図8)をベースとする。この青灰色土の下には茶灰色砂礫層(同図9)が堆積している。今回遺構を検出した地点と福之島との間では、この茶灰色砂礫層が表出しており、青灰色砂~粘土層は干拓時に削平されたことが伺える。

遺構検出面上には褐色粘質土層(同図2)があり、これには大量の縄文時代の遺物が包含されていた。この褐色粘質土層は戦後の干拓時に微高地が削平されて運び込まれたものと思われ、大量の遺物の存在から、



- | | | |
|---------|-----------|-----------|
| 1 耕作土 | 4 淡黄灰色粘質土 | 7 黒褐色粘質土 |
| 2 褐色粘質土 | 5 暗褐色粘質土 | 8 青灰色砂~粘土 |
| 3 スクモ | 6 黒灰色粘質土 | 9 茶灰色砂礫 |

第2図 弁天島遺跡基本土層模式図

微高地上にかつて多数の遺構や包含層があったと想定される。検出された遺構には、その性格を想定できるものはない。埋土は黒褐色粘質土（同図7）のものが多く、炭化物や骨の細片を含んでいる。遺構検出高はT. P. 82.3~83.0mである。

砂洲の西側には、縄文後期中葉の遺物を包含するスクモ層（同図3）が堆積していた。さらにその西側には、縄文早期末から前期初頭にかけての遺物を包含する黒灰色粘土層（同図6）が堆積していた。

4. 出土遺物の概要

出土遺物には、縄文土器・石器・木器などがある。およそ8割が褐色粘質土層から出土しており、遺構や遺物包含層からは、それぞれ1割程度の出土である。

縄文土器はコンテナ70箱程度の量があり、その多くは細片である。早期中葉の押型土器から晩期後葉の馬見塚式土器までが確認できる。このうち中心となるのは早期後葉の条痕文土器（茅山下層・上層式以降）から前期後葉の北白川下層Ⅱc式土器にかけてのもので、これら以外はごく少量である。このことは、弁天島遺跡の存続時期が主としてこの期間であったことを物語っている。このほかに、土器片錘も数点出土している。

石器はコンテナ10箱程度の量がある。多くが褐色粘質土層から出土したため、所属時期を比定しうるもの

は少ない。剥片石器では石鏃（約500点）・石匙（約40点）・スクレイパー（約50点）・石錐（約20点）・楔形石器（約30点）・有舌尖頭器（1点）などがあり、このほかにチップ・フレイクが多数ある。その石材はサヌカイトが大半を占め（約95%）、そのほかにチャート（約5%）・黒曜石・水晶（ともに数点ずつ）がある。

礫石器では磨石類（約55点）・石皿（約80点）・打欠石錘（約20点）・磨製石斧（約10点）・打製石斧（1点）がある。多種の石材を用いているが、このうち石皿は湖東流紋岩が、磨製石斧は蛇紋岩が比較的目的立つ。

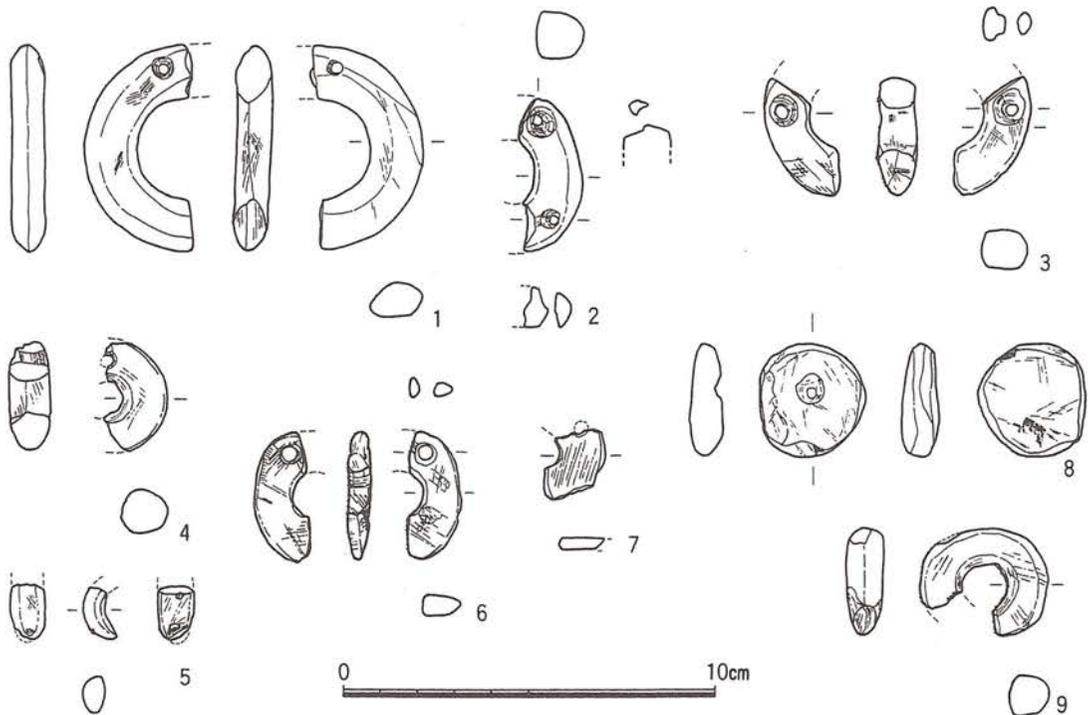
木器には、スクモ層から出土した櫛1点がある。

5. 弁天島遺跡出土の玢状耳飾

今回出土した玢状耳飾（第3図1~7）は、すべて半径50mの範囲の褐色粘質土から出土した。大阪府国府遺跡のように玢状耳飾を装着したまま墓に葬られた事例があることを考えると、その一帯が墓地であった可能性が推定される。ただしこの出土地点一帯は干拓の際に地山面が若干削平されていることもあり、墓と断定できる遺構は確認されていない。

出土した玢状耳飾はいずれも欠損していて、完形品はなく、1・2ヶ所の穿孔がなされている。

1はほぼ半分が残存し、平面形は外径約5.5cmのほぼ円形を呈すると推定される。切り目の一端が残存しており、端部の稜は明瞭である。断面は厚く、内周に明



第3図 弁天島遺跡出土玢状耳飾 (S=1/2)

瞭な稜を、外周に緩やかな稜をもつ。欠損部付近には直径のあまり変化しない穿孔（以下この穿孔をA型と称する）をもつ。淡緑色の葉口石（ソウチヨウ石）を用いる。

2はほぼ1/3が残存するが両端とも欠損する。断面形は厚く、円形に近い。欠損部付近に両方向からすり鉢状に施された穿孔（以下この穿孔をB型と称する）をそれぞれもつ。褐色の滑石を用いる。

3はほぼ1/3が残存し、欠損部は荒く研磨される。切り目の一端が残存しており、端部の稜は丸みをもつ。断面形は厚い。欠損部付近にB型穿孔をもつが、この穿孔は直径の異なる工具を用いて2段階にわたって施されている。また外周に近接する部分の摩滅から、欠損後に紐を通して使用していたことが推定される。黒色混じりの緑褐色の滑石を用いる。

4はほぼ1/3が残存する。両端を欠損するが、平面形は外径約3.5cmのほぼ円形を呈すると推定される。断面形は厚く、外周に緩やかな稜をもつ。一方の欠損部にB型穿孔をもつ。黄褐色を呈する石材を使用する。

5はほぼ1/4が残存する。先細りの切り目の一端が残存する。これのみ横方向のB型穿孔をもつ。欠損部には、内側から穿孔を試みた痕跡が確認される。褐色の滑石を用いる。

6はほぼ半分が残存し、平面形は長径約3.5cm、短径約3.0cmの縦長の楕円形を呈すると推定される。切り目の一端が残存しており、端部の稜は丸みをもつ。断面形は扁平で、外周に稜をもつ。欠損部は研磨され、その付近にB型穿孔が施される。黒色混じりの暗緑色の滑石を用いる。

7はほぼ1/4が残存する。断面形は扁平である。一方の欠損部に、B型穿孔が施される。使用石材は不明であるが、暗緑灰色を呈する。

このほかに、玦状耳飾の未製品である可能性をもつ石製品がある（第3図8）。平面形はほぼ円に近く、断面形はレンズ状を呈する。円の中心より若干ずれた位置に盲孔があり、これはB型穿孔を途中でやめたものと考えられる。灰白色～黒灰色の蛇紋岩を用いる。

発掘調査による出土遺物ではないが、これら以外に近接地で以前に表面採集された玦状耳飾がある（第3図9）。ほぼ3/4が残存し、平面形は長径約3.5cm・短径約3.0cmの横長の楕円形を呈する。断面形は厚く、円形に近い。褐色の滑石を用いる。

弁天島遺跡では、以上のほかに、過去に6点の玦状耳飾と3点の玉が出土している（第4図）。山内氏らによる調査では、「A・B地点」の遺物包含層から、縄文前期初頭の土器に共伴して5点の玦状耳飾と2点の管玉が出土している（10～16）^⑥。玦状耳飾はいずれも断面形は円形に近い。10～12は完形品で、平面形は円形・

楕円形に近い。13・14はほぼ半分が残存し、欠損部付近に穿孔をもつ^⑦。管玉を含め、いずれも褐色の滑石を用いる。京都大学総合博物館所蔵の「飾玉」（17）は、山内氏らによる調査と前後して小林行雄氏により採集されたものである^⑧。また滋賀県立琵琶湖文化館所蔵の玦状耳飾（18）は完形品で、断面形は扁平で平面形は隅丸長方形に近い。黒褐色の蛇紋岩を用いる^⑨。

以上を合計すると、弁天島遺跡では14点の玦状耳飾と1点の未製品、そのほかに3点の玉が出土したことになる。

6. 滋賀県内出土の玦状耳飾

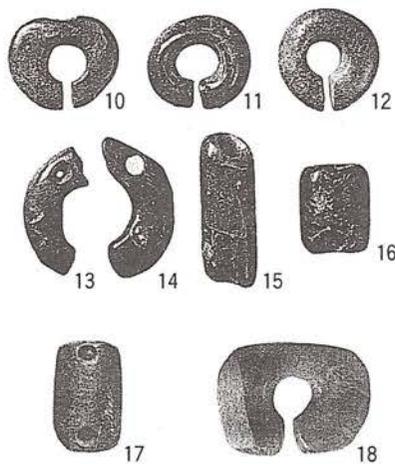
滋賀県内ではこれまでに、弁天島遺跡以外に3遺跡で玦状耳飾が出土している。以下に紹介し、弁天島遺跡出土の玦状耳飾を考える上での一助としたい。

① 赤野井湾遺跡（守山市赤野井町、第5図1）^⑩

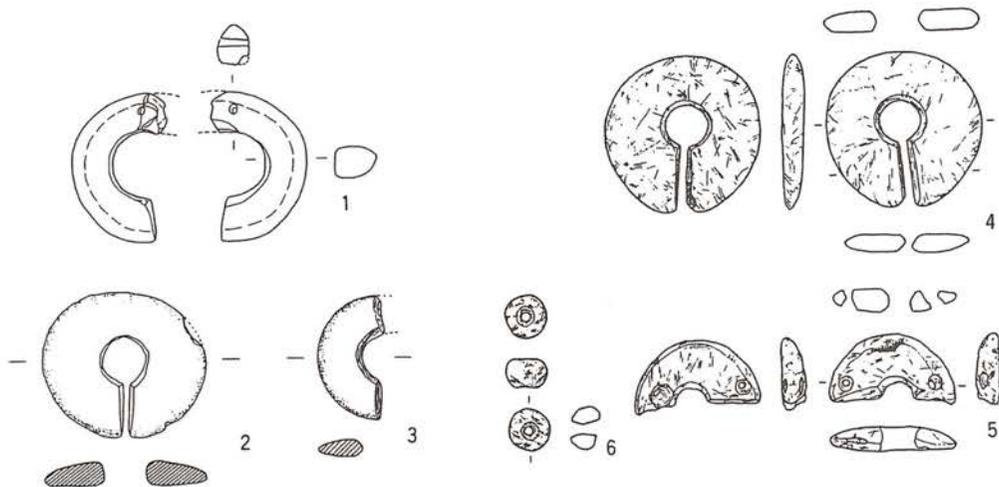
赤野井湾遺跡は琵琶湖東岸の湖底に立地する。玦状耳飾はアカホヤ火山灰下で検出された縄文早期末の遺物包含層から出土しており、その所属時期も同期とされている。この地点では獣骨や魚骨の入った集石土坑を検出している。玦状耳飾はほぼ半分が残存し、平面形は外径約4.5cmのほぼ円形を呈すると推定される。断面形は厚みを持ち、外周に緩やかな稜をもつ。欠損部付近にA型穿孔がある。褐色の滑石を用いる。

② 北萱遺跡（草津市北萱、第5図2・3）^⑪

北萱遺跡は、琵琶湖に近い低湿地の微高地に立地する。玦状耳飾は自然流路の埋土から2点が出土した。2はほぼ完形品で、3はほぼ半分が残存する。ともに平面形は円形に近く、断面形は扁平で、灰緑褐色の蛇紋岩を用いる。形態から縄文前期後半に比定される。玦状耳飾が出土した自然流路からは各時代の遺物が出土しているが、同期の土器も出土しており、その意味



第4図 弁天島遺跡出土玦状耳飾・玉類（S=1/2〔18を除く〕）



第5図 滋賀県内出土球状耳飾・丸玉 (S=1/2)

でも齟齬をきたしていない。

③ 上出A遺跡 (近江八幡市御所内町・蒲生郡安土町中屋、第5図4~6) ④

上出A遺跡は、旧愛知川の堆積により形成された氾濫平野に立地する。蛇砂川地点では縄文前期後半の竪穴住居や土坑が多数確認されており、球状耳飾もそうした土坑から出土している。4は完形品で、断面形は扁平である。5は報告書では垂飾品とされているが、筆者は球状耳飾と考える。ほぼ半分が残存し、欠損部と切り目付近にB型穿孔をもつ。断面形は扁平で、黒色混じりの白色の蛇紋岩を用いる。このほか同じ石材を用いた丸玉(6)も出土している。B型穿孔をもつ。

7. おわりに

弁天島遺跡で今回出土した球状耳飾は、石材や類似資料の存在から、北陸地方からの搬入品と思われる。しかし、未製品の可能性をもつ資料の存在は、当地で製作された可能性も想定させる。

所属時期については、1~5・9~14は、平面形は円形または横長の楕円形を呈し、断面形は厚い。赤野井湾遺跡出土資料に類似し、縄文早期末~前期初頭に比定されよう。一方6・7・18は平面形は縦長の楕円形を呈し、断面形は扁平である。北萱・上出A両遺跡出土資料に類似し、縄文前期後半に比定されよう。また筆者がA型・B型とした2種類の穿孔が認められることから、これらについては製作地の問題も含めてさらに検討する必要がある。

14点という出土点数については、県内の各遺跡と比較すると突出している。全国的にみても、縄文早期末~前期初頭としては福井県桑野遺跡(69点)⑤に次いで多く(11点)、西日本でも屈指の出土点数といえる。

球状耳飾を含め遺物については現在整理途中であり、今後作業が進展する中で、弁天島遺跡のあり方について考えていきたい。

本稿を起すにあたり、以下の各氏には大変お世話になりました。文末ながら、感謝いたします。坪井清足・泉拓良・藤田富士夫・植田文雄・川崎保・嶋本教子(敬称略)

なお、文化財保護協会の中村健二・瀬口真司・鈴木康二・辻川哲朗各氏の助言指導を受けた。

(財滋賀県文化財保護協会 小島孝修)

註(凡例:滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会→県教委・財協)

- ① 栗島義明「球状耳飾」(『縄文時代研究辞典』東京堂出版 1994)
- ② 坪井清足「あづち-いせき」(『図解考古学辞典』水野清一・小林行雄編 東京創現社 1959) など
- ③ 西口陽一「耳飾からみた性別」(『季刊考古学』第5号 雄山閣 1983) など
- ④ この資料を根拠として、山内氏は球状耳飾の大陸渡来説を提示している(山内清男「縄文草創期の諸問題」[MUSEUM] 第224号 1969)
- ⑤ 13・14については、泉拓良氏は古代中国の玉器「璜」であるとしている(泉拓良「球状耳飾の謎」『国府遺跡の謎を解く』藤井寺市教育委員会 1997)
- ⑥ 横山浩一ほか「京都大学文学部博物館考古学資料目録」第1部(京都大学文学部 1960)
- ⑦ 滋賀県埋蔵文化財センター「石の文化史」(『埋もれた文化財の話』16 1995)
- ⑧ 平井美典ほか「赤野井湾遺跡A」(『赤野井湾遺跡』第3分冊 県教委・財協会 1988)
- ⑨ 三宅弘「北萱遺跡」(県教委・財協会 1994)
- ⑩ 鈴木康二ほか「上出A遺跡(蛇砂川地点)」(県教委・財協会 1999)
- ⑪ 木下哲夫「桑野遺跡」(『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年~五年度』金津町教育委員会 1995)